# 木場職人

細田木材工業株式会社 顧 問 細田安治

木場職人は川並さんの角乗から始まり川並、と言っても厳密には筏師と川並とに分かれる。つまり筏をつくりまとめ、木場迄運ぶ川並を筏師と呼ぶ。川並とは筏師が運んできた筏を検査し品質を見極め等級分けする鑑識眼をもった権威者を川並と呼ぶ。

今号では川並を筆頭に木場にとって、木場が木場としての機能を発揮し社会的使命を果たすために必要な人々、つまり木場を動かす職人たちを紹介する。(敬称略)

## 木場七職人

川並	丸太・角材の樹種、品質・寸法が産地手板 (外材は産地オリジナルインボイス) 適正か検査する人。筏組み等々の権威者 河川・堀の管理・川並鳶ともいわれる
筏師	本船取り、粗々筏組み、運搬曳航
船頭	ダルマ船の船頭、ひき船の船長
木挽き	丸太の欠点を見抜き手挽の大鋸で製材する。
荷揚げ人足	河川に面した木材倉庫に横付けされた伝馬船から、木材を肩で担ぎ上げる人足。
結束屋	製材所で製材した製品の検査等級分けの目利き権威者、製品を結束するのが主な仕事な ので結束屋と言う
馬方	馬と台車を馬車やから、一日いくらで借り、10石程の製材品を木場内の運搬を請け負った。

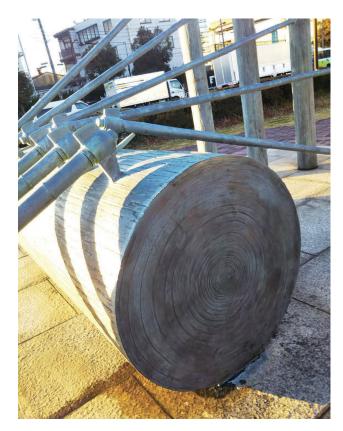
筏師は前号で本船取りから筏組し回漕までの大変な作業のご紹介をした。今号では木場七職人の筆頭である川並についてレポートする。

### • 川並

川並を語るには、木場という場所がどんな所だったのかを抜きにしては語れない。小唄の文句にもある通り、木場は橋と堀の町、「木の香ゆかしき深川の」と続き、橋がたくさんあるということは、川がたくさんあるので、橋を渡って木場深川に入ると、木の香りがプーンとしてくる。これがそのものずばり、木の場所「木場」だ。その木場は、木材や、川並、筏師、木挽き、荷揚げ人足の町でもあった。川並とは、木場で原木を仕分け、検品する川並鳶のことを言う

#### ◇川並の仕事は木材の仕分け人

川並の仕事と筏師の仕事との違いをもう一度説 明する。本船で運ばれてきた原木が東京湾に着く と、荷主が自分の買った原木を筏師に頼んで筏に 組み貯木場迄持ってくる。筏師は貯木場で大まか な仕分けをし、原木を再び筏に組み直す。東京湾 に着く原木は、大半は商社が買い付けた輸入材で ある。原木は一次問屋、二次問屋を渡り、製材所 で製品になるが、ここで川並の出番となり、こま ごました仕事を処理する。具体的には丸太を入れ 替えて、 筏の見場 (見てくれ) をよくし売りやすく する仕事だ。きれいに筏組み(陳列)して見場を良 くする。木質の確認、検尺といって石数(数量)を 確認、等級(質)を検査確認する。 南洋材で言えば、 節はあるか、腐れは、ときん(伐倒時の引き抜き) はないか、検尺(寸法)はオリジナルインボイスは 正しいか。傷引きはしてあるか。等々問屋の社員、



丸太をタメ竿で固定し検品する

昔風に言えば、入りたての小僧さんなどは及びもつかない、当店の番頭さんをしのぐぐらいの腕の持ち主である。経験則により、木を見極め、寸法を確認し、品質を保証(等級付け)ができるほどの権威者でなければならぬ。と言われていた。

商いの流れは、商社、一次問屋、二次問屋から三次問屋へと、最後は一本買いの個人経営の地挽屋さんへと細かい商いになっていく。この流れに川並はついていく。というか流れを作るほどの権威者だ。検尺は指揮と言って、大きな曲尺とコンパスのような物差しがある。約半分沈んだ丸太の見えない部分までを挟んで寸法を測る物差しだ。この指揮の当て方が人によりわずかに違う。ラワン丸太のような大径木であり、しかもどちらかと言えば安物とは言い過ぎだが、国産材の杉、ヒノキなどに比べれば安物には違いない。検尺は長さ1尺とび、直径は5寸とびで仕入れていた。税関堀や木場にある私有堀へ出向きこの筏が売りに出ている。「価格はいくらだ」。と言われるままに買わされていた。当時は完全な売り手市場、前述の通り、持ってきたほうが勝ちの世界だった。しかし、景気は小さな波を繰り返していた。こちらは死に物狂いで丸太を買い、同じように売り先を探し、お得意様になって頂き商売ができた。これも、丸太を流通させる仕掛け人の川並さんのおかげと感謝申し上げる。

次に流通に欠かせない数量の計測について説明するとしよう。

指矩で測った寸法を丸太に書き込むには、「ガリ」という道具を使う。ひっかいて印をつける道具である。川並は大工さんが腰にぶら下げている道具袋より大きめの袋をぶら下げている。この袋の中に、又カン、カン抜きハンマー、ガリ切り、を入れている。筏を動かすための必要な道具だ。丸太の計測は、寸検または検地と称されている。

次に川並の代表的人物を紹介する。

#### • KのKさん

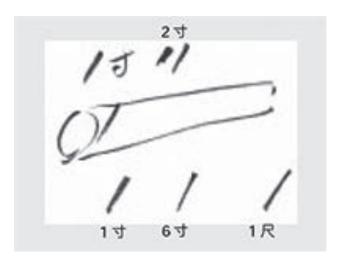
と言えば、長年にわたり角乗保存会の会長を努め木場の伝統を後世に伝えた有名な男だ。「角乗保存会」のみならず、木場のもう一つの伝統として有名な「木遣り」の有力な歌い手で美声を誇り、更に木場の守り神富岡八幡神社の神輿の担ぎ手を東ねる神輿総代会の会長も務めた。

本祭りに天皇陛下がお出ましになる天覧祭りの際には、天皇陛下へ神輿の説明役を務めたこの稿のテーマ川並を象徴する木場の有名人だ。で以下 K さんのご紹介をする。

川並

#### Kさんの談話

べらんめ調の話言葉が面白いのでご紹介する。 具体例として私が、Aという二次問屋の出入りの 川並だったとします。原木問屋から仕入れた丸太 は、石数で買い上げて堀まで運んできます。それ を一本一本測り直して、浮かんでいる丸太にガリ 引きで正しい寸法を抑つけしてやる。おもしろい ことに一から三寸は一から三本引っ掻くんです が、四寸は四か4と書き、五寸は×(バツ)、六寸 は一寸と同じで一本なんですね。見りゃわかると いうか、一寸と六寸を間違えるわけがないんです よ。一尺も一本です。



ガリ引き

同じようなことですが、よく親父から「サシは上にしとけよ」と言われたものです。検尺は差し金を使って測るんですが、目で測れということです。目で間違いなく測れるようになれば、差し金を当てるのはただ確認だけになるんですね。それを差し金に頼るから数字を読み違えることになる。要は、それを戒める言葉です。

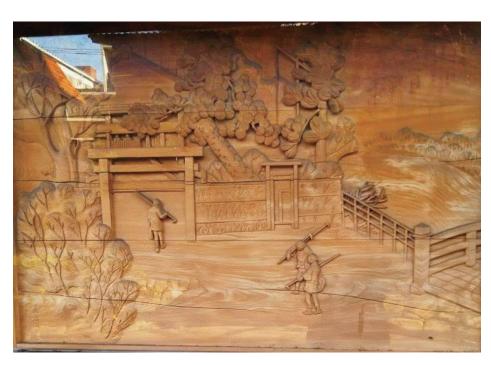
検尺するのは確認の意味もありますが、まとめ買いをした丸太は、細かく測ると合計した石数が上がるんですね。そうすると例えば百万円で仕入れたものが百十万円になって、我々の手間賃が出る。出入りの川並として旦那の役に立つというわけです。

さて検尺が終わると、次の買い手に渡すのにきれいに並べ変えてやる。太いのと細いのがばらばらに並んでいる筏っていうのは見栄えが悪いってんで、両端に細い丸太を、中央に太い丸太を並べて蒲鉾型に作るんです。そうしてできた筏を、今度はBと言う三次問屋の川並が検品するんです。丸太の直径が百分〈ぶ〉(一尺)で長さ十尺が一石。丸太の状態でその見当をつけるんですが、それが九寸七分しかなかったとする。分切れ(ぶぎれ)と言うんですが、そういうのを見つけると「おい、これは切れるじゃね

えか」と指摘されるんです。Aの川並としては、危ないのを覚悟の上で目一杯測るわけですよ。ある程度利益は出ているのですから、そこで赤伝が切られてもAの旦那の損にはならない。かえって「うちの川並は、俺のために頑張ってくれた」ということになる。顔が立つということです。逆にBの川並が分切れに気付けば「さすがうちの川並だ」ということでBの旦那に顔が立つ。だから、どの川並も目一杯で木を測る。当然、川並同士で、分切れで言い争いになることもありますよ。

「切れる(分切れている)じゃないか」と言われる。「おじさん、どこが切れるんだよ」というと、「おまえ強情はるんじゃないよ。切れてんじゃねぇか。」こっちは、差し金を引っかける所にゴミで厚みをのせて木をひっかけてるから「切れてないじゃないか」と。すると「おいKちゃんよー。俺は何十年もやってるんだよ。この仕事をよー。」俺も強情だから「おじさん何言ってんだよ。年のこと言うなら、おじさん、俺は差し金もって・・・・・からオギャーと生まれてきたんだよ」って言うとおじさんが、「いや。参った。お前には参った」となるわけですよ。そして「おじさん、借りとくよ。次の時返すよ」となるわけ。そして、今度相手がそのおじさんの時は、逆にうんと甘く測ってやるわけですよ。「今日のところは、貸しといてやるぜ」と言い、受けるほうも「この借りは、次に返すよ」っていうんで、持ちつ持たれつだったんです。

注石数 体積の単位。木材の場合、一石は十立方尺を表し、約0.278立法メートル。



木場の川並

続く